COSMOS集

「あすなろ集」特選

松尾　祥子選

特　別　な　人　　清　野　洋　子＊青　森

手から手へ伝わる想いに言葉なく体が発する熱量でいい
暖冬もすんなり春とはいかないでバランスとるごと三月の雪
一粒のチョコレートには心までとかす媚薬か笑みあふれだす
まだ誰も知らぬふたりのはじまりは市民課戸籍係とともに
特別なことではなくて日常をともに生きてく特別な人

母　の　願　い　　成　田　裕　子＊青　森

古雛の御髪やさしく整えし母の手思う節句の朝に
スプーンに一杯すくったヨーグルトとろり静かな今朝の幸せ
寒い朝ひゅっと息止め窓開ける今日の光と風を迎えに
ピザひとつ君の皿に取るやわらかく伸びるチーズに少し見とれて
雛の顔あなたに似てると言う母の願いを今頃やっと気づいた

さかな屋の娘　　本　田　初　江　群　馬

小一の子の埋めし種甘夏が今たわわなり誇れるごとし
世話になりしあの人この人に会ひに行く甘夏配りにかこつけ夫は
さかな屋の娘と言はれ馴れぬ手に出刃で挑みき新巻鮭に
満面の笑みに結婚告げる姪熟年夫婦に幸多かれと
山盛りの塩を投げ上げ沸かしたる小兵〈照強〉今日引退す

パ　ト　ロ　ー　ル　　人　見　江　一＊神奈川

地震から十三年目の被災地はまだ被災地と呼ばれ続ける
クレープのかけらかざせば怖がらずスズメ手に乗るシーパラダイス
縄張りをパトロールする雄猫のごとく朝の散歩続ける
昼間会い言葉交わした人の名を思い出せずに日付が変わる
議員らの裏金づくりに憤りながらも済ます確定申告

蚕　ノ　社　　奥　浩　昭　東　京

京都駅烏丸口ゆ裏道を歩みて着きぬ蚕ノ社
西陣の織物の基つくりしは渡来人なる秦氏とぞいふ
大陸に渤海といふ国ありきとほく奈良から平安の世に
渤海使来し朱雀大路の鴻臚館「墨芳しき」と蕪村の詠める
またいつか京の遠近歩かむか『京都の渡来文化』手にもち

津金　規雄選

これが俺か

藤田邦彦＊東京

葬式に顔寄せてくる男いて無駄話聞く目をそらしつつ
外したる眼鏡のレンズ汚れおりこれが俺かと思うわびしさ
暗いうちに烏が騒ぎ日の出ころ雀が鳴いて朝が来まする
真夜中に酔っ払いの声過ぎゆきてあとは静かな日曜の夜
もの持たず空手で道を行くひとをなにか羨む初夏の町かな

特別価格

宮梓一＊東京

「セットなら安くします」とグッピーのつがい特別価格のいのち
油断してクリーニングへジャケットを出した翌日春は遠くへ
ごめんねの四文字が無いメッセージもう一度だけ縦読み試す
意図的に主語を隠したアドバイス　口に残った玉ねぎの皮
銀ブラをしようとしても周りにはスタバばっかり銀スタをする

老人

須貝房子＊新潟

椿の葉四季を問わずにかがやきて春一番に花をかかげる
コロナ禍で神社の行事縮小し豆まきも無く町静かなり
紺碧の佐渡の島山日本海に小さな屏風立てたるごとし
締め切りが遠くにあればあれこれと言葉さがしの時間楽しむ
「老人」と男女の区別なく使う言葉を嫌う我八十一

昔のままに

長谷川綾子＊新潟

朝日射し煙る湯船は波きらら楽しき予感に鼻歌も出る
無口なる黒き家並のすき間より翡翠色の海見え隠れする
降って消え消えては降るをくり返しそれでも春はゆるゆる近づく
歳だけが我を追い越し過ぎてゆく思いも願いも昔のままに
春風に波追い波の生まれくる碧の海は白く泡立つ

空の向こうへ

星野尚子＊新潟

前日の吹雪を制し卒業の門出を祝う今日の青空
三年間もがいた日々を乗り越えて織りなす子らの卒業合唱
愛犬も長女の巣立ちを見届けて旅立ってった空の向こうへ
亡き骸のまだ消えてないぬくもりをこの手のひらに縫いつけていく
切り取ったふわふわの毛に触るとき亡き愛犬の不在にむせぶ

水上　芙季選

小さきもの

福本郁子＊京都

文庫本を旅のかばんに入れただけ波立つ春の海を見ており
砂風呂の砂は重くて温かし出れば孵化した生き物のよう
黒砂糖の板はねっとり艶めけり波音高き道に立つ店
花の名を思い出せない春はじめ香り出で来てああ沈丁花
せわしなく花の蜜吸う小さきもの目で追う我も小さきものなり

五軒の家

大池　アザミ＊兵庫

だんなさん倒れたらしい　さざ波のように噂は広がってゆく
あの空地に五軒の家が建つらしいどう建てるのかパズルみたいに
工事する男たちみな嬉しげで働くことを見せつけるよう
だんだんと息苦しさが増してくる本棚の本整理するとき
カーテンの向こうの窓は明るくて暮れない今日を早じまいする

ピカチュウ

小野　久美子＊兵庫

本当は値引きなしよと値引きされ買うブラウスの花いちもんめ
ふんわりと花びら重なり重なってラナンキュラスの花のふわふわ
細き脚フルスピードで動かして白せきれいの走り軽やか
前をゆく人のリュックにぶらさがるピカチュウこちらを向きそうで向かず
天井の無数の配管露出させ未完成として完成のカフェ

ひな祭り

沢田　弘子　奈良

傘さして回覧板を届けゆく三日振りなる会話の楽し
紙雛に甘酒供へひな祭りミニ水仙の黄色の優し
幼き日母と飾りし雛人形何処へ消えしやあの七段飾り
お水取り終へても寒き今朝の風芍薬の赤芽少し顔出す
満開の花を咲かしし梅の木に実の一つだに今年は成らず

じつくり洗ふ

山野　いづみ　鳥取

夫植ゑしチューリップの莟ふくらめり思ひの外よむらさきなんて
耕運機の起こしゆきたる春の土カラスは漁る首をふりふり
空き家の玄関先をよぢ上る凌霄花は過ぎし日を呼ぶ
十二万走り傷なき〈プラッツ〉の車体を夫はじつくり洗ふ
免許証返してふたりバス通ひの第二の人生ゆつくり行かな

鈴木千登世選

「ほんとうはね……」

松岡　綾子　香川

自生するバイカオウレン一目見む博士も登りし山路を辿る
いたづらの殴り書きさへ愛しくてすぐには捨てぬ「孫沼」深し
四年間マスクの下で眠りゐる表情筋の目覚めは遅し
「ほんとうはね……」大人ですから言へませぬ拗ねた心を持て余す夜
野菜にも昇進あるらしおめでたう「指定野菜課ブロッコリー殿」

高校生球児

鈴木　喜代子＊愛媛

我が内に青虫居るがに欲するはホウレン草に春菊・高菜
高校生球児のような頭出し土筆は群れて畑に並ぶ
咲き満ちて支えきれずに項垂れる水仙はなお香りを放つ
西空の残月を背に白梅の微かに香る古寺のあけぼの
目白・鳩・鵯も食事に訪れる古民家カフェは長閑なりけり

苦髪楽爪

高見　艶子　愛媛

病みたれば苦髪楽爪（くがみらくづめ）と言ひし母偲びて吾の長き爪見る
子ら二人持てるが吾の誇りなりその子ら何故か結婚なさず

家事せねばかく爪伸びぬなげくなく赤きネイルで人おどろかさむ
折節にひたすら娘に会ひたきを口にしてならじ心にしまふ
薬指の指輪の跡も消えかかり吾が退院の日も近づくや

ウインクで去る　　鶴田竹一　長崎

点滴のポタリポタリがわたくしの命のかけら掘り起こしゆく
ミニバイクの給油代金「３３３」ガッツポーズに店員の笑み
梅の花庭いつぱいに散らかして春一番の通り過ぎ行く
服除けてインスリン注射せし朝も春まだ寒し身震ひの候
特養に移りし妻のお小言に「うん」と頷きウインクで去る

しあはせ　　春野直子　熊本

切り岸のやうな病を患ひし夫はつぶやく　今でよかつた
夫の癌放射線治療に寛解す生きゐる時が宝物なり
何気ない日々の暮らしにさり気ない会話のありてしあはせがある
「よく見てて文字にもリズムがあります」と師はなめらかに筆を走らす
筆文字の未熟な吾に師はいつも「あなたらしくて良いですね」と言ふ

大松　達知選　「その二集」特選

ほんとの挨拶　　くどう　れいん＊岩手

捨てようとして持って知るスプーンの柄に描かれた立派な葡萄
いきてる、いきてる、いきてる、水槽すべてにちいさく優はそう言う
いるかにはいるかのほんとの挨拶があるはずなのに手を振ってくれた
めずらしく黄色のワンピースを買った　わたし春から雷になる
板チョコをもくっと割ってこの疲労すこしでも小分けにできるなら

みかん汁　　谷川　恵　埼玉

私より冷たいひとはゐないだらう白壁をぺたぺたぺた触る
流暢に話せてゐるやうなる父とだいじな話は嚙み合はぬまま
みかん汁で汚れた紺のワンピースわたしの頭もみかんだらけで
ごめんなさい　何万回と言つたけどあなたは一度も言はずに逝つた
〈叩かれる〉急に襲つてくる震へ　蒸したかぼちゃを飲みこめず、吐く

準一級　　谷真樹＊神奈川

アシカ橇に乗って氷のうえをゆく幼子の尻にまるい濡れあと

庭に置いた半個の蜜柑にどこからか集まってきためじろ隊員
〈あっさりと他人を見かぎる検定〉の準一級を取得しました
街頭で冊子をかかげ布教する若き信者の貧乏ゆすり
道の駅で買った原さんの長芋を朝日歌壇の紙面でくるむ

すてきですから　　新美　亜希子＊神奈川

オクターブ駆け下りまた駆け上がるベートーベンのあしおとを聴く
はじめたらもうはじめてが過ぎ去ってわくわくにもう寂しさのあり
スカートがすてきと言われ声がないあなたはいつもすてきですから
本当は最初からぜんぶ決まってる疑惑なんかは吹き飛ばしてよ
良い香りの油のついた大皿をなめて味わうつるつる加減

血　液　　松下　誠一＊東京

カワセミの実物は知らないけれどカワセミのイメージが凜とする
カメムシの生きてんだか死んでんだかを外へと運ぶことの大変
春らしく暖かい日をごま油ひとつを素手に持って帰った
アテのくる前から呑んでいるきみを去年の僕が好きと思った
噴き出るというほどエネルギーのない血液が鼻から垂れてくる

大野　英子選

春　雪　　上野　成＊新潟

搗きあがる餅まん丸の張りぐあい若かりし妻の胸乳思わす
濃緑のチューリップの芽を際立たす一センチほどに積もる水雪
ポクポクの食感楽し妻和えしミソマヨつけて食べるニンジン
意地悪な孟宗竹だこと春雪をまともに受けて道路をふさぎ
雪の野にぽつんと二人手をつなぎ白鳥わたるを見送りし夢

耳にイヤホン　　桜井　奈穂子　新潟

「帰省する」と連絡あればいそいそと子の好物を買ひにゆく夫
かろやかに駅の階段くだりくる娘の黒きコンバース見ゆ
とりあへず就職せよと説く夫の向かひの娘の耳にイヤホン
脱皮するやうにこたつを抜け出して春のコートを身にまとふ吾子
夜行バスにまにあふやうに送りゆくフロントガラスにかかる粉雪

おまけの小箱　　権田　陽子　静岡

キャラメルは後回しにしてセロファンを剝がしおまけの小箱を開ける
木目込の二組の雛かざり終へ姉妹は膝を揃へて坐る
数へきれぬ惨禍乗り越えアレッポのオリーブ石鹸千年つなぐ
地衣類の分厚き図鑑抱へ込み図書室を出る小一男子
少年は少し怒つた顔をしてピアノ弾き終へ深く礼する

叶わぬ願い　　若山　佳余子＊愛知

たわいなく取りとめもなく語り合う帰省の子とのひとときの幸
賑やかな一泊二日あれやこれあっという間に時は過ぎ行く
患いて余命知らされ臥す兄へ声をかけても言葉返らず
早朝の静けさの中栗ひろう幼き兄と幼きわたし
出来るなら自宅のベッドで寝かせたい叶わぬ願いと分かりておれど

深夜の魔法

中村泰子＊京都

待ちながら医師のあだ名をあれこれとゆっくり悩む母の楽しみ
厳格な主治医のあだ名は「ラブリーK」マスクおさえて母と目で笑む
悲しみを友に決っして見せぬまま笑顔で逝った泣き虫の母
母のためにしたかったこと湧いてくるもっともっとと泉のように
悲しみが湯船にゆっくり溶けていきすうっと消えた深夜の魔法

田宮　朋子選

もむない

山添聖子＊奈良

「もむない」の語源は『日本書紀』と知る祖母にも伝えたき春彼岸
酒粕を浸したボウルにラップする夢の汀の広がらぬよう
静謐と言うとき動く唇のかたちの中に宿る静けさ
雨ごとに黒の印象やわらぎて若草山の内なる芽吹き
木蓮のつぼみの中であたためた今年の春は明日孵ります

じぐざぐ走る

浦木妙子＊鳥取

脂のるマグロのカマをたいらげし夫の皿に恐竜の骨
補助輪を外したばかりのモンスターぶるぶる揺れてじぐざぐ走る
転んでも転んでもまたペダル漕ぎ幼は風を味方につける
八十分百八十度で焼き上げた焼き芋急いで義母に届ける
朝光にアスパラ色のチュニックの裾ひるがえし自転車でゆく

母の味

舛岡慶子＊広島

焼き物の小さき獅子がにらみいる玄関に来る邪気は入れぬと
しとしとと季節はずれの雨が降り傘をさしての散歩は続く
掘り返す冬大根の白き色みずみずしさをたたえてうまし
皮伸ばし満州ぎょうざ作れどもたどりつけない母の味には
肩組んで友との別れおしみおりスーツ姿の六歳卒園

QRコード

福川和枝　長崎

人の名のとつさに出で来ぬ時ありて漢字パズルに励みてもみん
宵の口網戸に守宮貼り付きて部屋を覗けばカーテンを閉む
外灯のアームは鳥らの拠り所ゴミ出しの日も見られてをりぬ
QRコード読みとる技教はる新しき知識得るは楽しも
父母よ上等舶来はとほき日の夢スーパーの棚を見て過ぐ

聞いてみたいな

安永徹＊熊本

紅梅が今年も咲いて春が来た生々流転の中なりわれも
腰痛は二足歩行の為せる業（わざ）ペンギンたちに聞いてみたいな
この頃の戦争もはや電子戦弾（たま）丸打つよりも電波発射す
赤と黄の帽子被りて園児らが朝早く行く「今日はどちらへ」
南極の船が出る町ウシュアイア厳しい自然ののどかな港